



俺と私と僕と。



「話がある」

そうあいつに言われて俺は友人夫婦の家を訪れた。

俺たちは大学時代の同級生で、いつもろ人でつるんでいた。

地方から上京してきて友達もいなかった俺に話しかけてくれたあいつ。

明るい笑顔でいつも場を和ませてくれた彼女。

彼女を好きだったかと聞かれれば、否定はしない。

だけでも、彼女はあいつを選んだ。俺もそれで本当に良かったと思った。

二人共俺の大切な友人だ。文句なしにお似合いだった。

あいつは一流企業に内定が決まって、数年後彼女と結婚。

俺はといえば可もなく不可もなく、毎日を「こんなもんか」と生きている。

違う道を歩んでも、俺たちの交流が途絶えることはなかった。

改まったの話。もしや吉報だろうかとか構えることもなく気楽だった。

もし俺がこの話を聞く前に戻れるならば、果たしてどうするだろうか？

彼女がつまみを作り、台所へ立つと、
あいつは声を潜めて話しました。





話された言葉は飛び飛びにしか理解できなかつた。

「僕の前で彼女を抱いてくれないか」「彼女は了承している」

「悪い話じゃないはずだ」「ただしてくれるだけでいい」

「とにかく一度考えてみて欲しい」

単語が頭の中で落ち着かず走り回っている。

彼女と、俺が……？

彼女とあいつと、そのままろ人で飲んだはずなのに記憶が無い。

気付けば俺は自宅のベッドで目を覚ましていた。

本当に昨日2人の家に行ったのか？

できることならば、夢であって欲しかった。

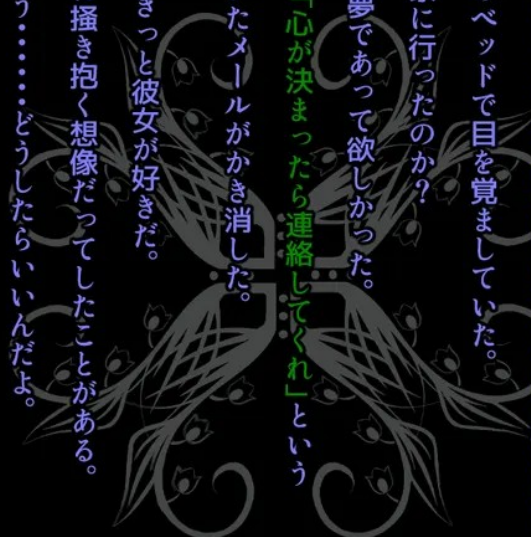
そんな淡い願いは、「心が決まったら連絡してくれ」という

あいつから届いていたメールがかき消した。

確かに、俺は今でもきつと彼女が好きだ。

昔は彼女をこの手に掻き抱く想像だっけしたことがある。

だけど…ちくしょう……どうしたらいいんだよ。



あれから半月が経った。
その間の俺は抜け殻のようだっただろう。
今日はここ最近よりもっとひどい有様で、
朝から何もする気が起きなかった。
夜になったら俺はこの体を引きずり、
あいつの家へ向かうんだ。





あ...
あ...
あ...

俺を迎えたのは、あいつだった。

そして今までもこれからも入るわけがなかった部屋に通される。

2人の寝室。そこでは彼女が待っていた。

ベッドの上で、これから起きることを理解し俺を見つめている。



こうしてのこのこ来ておいて、「本当にいいの？」なんて聞けない。
彼女の手で外されていくその服のボタンはカウントダウンだった。

「お前からしてあげなさい」

なかなか手を伸ばさそうとしない俺を見てか、
この喜劇を取り仕切る監督であるあいつが一言放った。



その言葉を合図に、彼女の手が俺にかかる。
カチャリ、カチャリという小さな金属音がやけた耳に響いた。
自分の立ち位置をまだ理解してない俺のモノは、
彼女の眼前に放り出されてなお萎縮をしている。



小さな口が俺の先端をとらえる。
温かい口内で舌先が微かに亀頭を舐め上げた。
軽く感電したらこんな感じなのだろうか。
ピリリとした刺激が体を駆ける。



まのぼんと音がしたうなほどに彼女から弾き出た俺自身は、
まじまじの羞縮はどいへやらすっかり出来上がっていた。
俺の体は、俺の心よりも潔いのかもしれない。
俺は両肩を彼女に押されるがまま、柔らかいヘッドに横たわる。

重力に抗い反り立つ俺の先端が、少しずつ彼女を割いていく。

「…はぁっ」

彼女の口から吐息が漏れた。

ほっ…

あ…っ
すっ…っ

ほっ…

ぬっ…っ

ぬっ…っ

ぬっ…っ

大きな抵抗もなく、俺は順調に飲み込まれていく。

あいつはどんな顔をしてこの行為を見ているのか。

俺はそれを見る気にはならなかった。

ただ、初めて触れた彼女の内部は、温かく心地良い。



その瞬間ギリギリで留めていた堰は切られ、
精液が彼女の奥に何度も叩きつけられていく。
体を震わせ息を荒げる彼女の中でお陰は収まらず、
一度達したことでどうやら俺は吹っ切れてしまったようだった。



抜くこともせずそのまま彼女を組み敷き、体を押しあわせる。
足を抱え上げ押しつぶすように抜き挿しを繰り返せば、
彼女の中からは2人分の体液が溢れ出す。
賽は投げられたんだ。もう、俺を隠すこともない。

は！

はぁ♡♡♡
おんあ♡♡♡
は！

ズンズン
ゴロッ
ズンズン

...ト

んん...
んん...



吐息が交じるくらいの距離に彼女がいる。

俺の体に悶え、悲鳴のような喘ぎ声を上げています。

夢のようだった。たまらなかった。

叩きつけるように腰を振り、体がぶつかり合う卑猥な音を聞く。

びしょびしょびしょ

どうかしているとされるかもしれない。

僕も最初は自分を疑った。

愛しているはずの妻を抱いても、どこか満たされな

どこか夫婦として不完全燃焼だった僕たち。

そして僕はある答えへとたどり着いた。

—妻が誰かに汚されているところを見たい。

僕しか男を知らない妻が、僕以外で乱れ狂う姿。

その妄想は次第に妄執となり脳を蝕んだ。

妻への提案は賭けだった。

僕は僕のために、親友を利用する。

妻が首を縦に振ったのは、果たして幸だったのだろうか。





僕はその日から、味わったというのをいっしょに感じていく。

隠していた気持ちも放しに行かだぶつける友人。

本当に感謝している。

おかげで僕は、淫の言葉で罵られることがなくなった。

ぬいっ、
30ん、♡

又々♡

ズン♡

んん♡

あ♡
や♡

あ♡
あ♡

んん♡

妻に導かれ、友人は彼女の中に自身の子種を注ぎ込んでいる。
そう、これでいいんだ。

どうじゃなきゃあ、汚されていないじゃないか。

もっとだ！もっと僕だ、僕の知らない彼女を見せてくれ。



「ぎゅーっ♡」
「ぎゅーっ♡」

「ぎゅーっ♡」

「ぎゅーっ♡」

「ぎゅーっ♡」

「ぎゅーっ♡」

「ぎゅーっ♡」



その声が届いたのかどうなのか。
友人は僕に見えるように彼女の体を抱え上げる。
罪悪感があるのかどこか遠慮がらだった最初の交わりから何度か回数を重ね、
友人は「分かって」くれたのかもしれない。



まるで自慰のための道具のように妻の体が上下に揺れる。
露わになった結合部からは交わりの証が漏れていく。
僕たちの関係は不可解かもしれない。だけれどもどうだ。
夫ではない男に汚されている彼女は、こんなにも綺麗じゃないか。

あふ
あふ
あふ

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ

はあ



妻の腫は快楽に染められている。

今僕のことを見えていないのかもしれない。

そう思うまでに友人の行為は激しかった。

この時間、この瞬間だけは、彼女は友人のものなのだろうか。

あーっ♡
おーっ♡

ほ♡

ほ♡

んんん♡

んんん♡

ズンッ

んんん♡

んんん♡

両腕を引かれ立たされた妻は、間髪入れず穿たれる。

ほんの僅かに残った羞恥心を捨て去るように、僕のすぐ前ではしたなく口を開き喘いでいる。
そんな妻から、僕は目が離せなかった。

あゝ
はぁ

クソ
クソ
クソ

うん

ズ
ズ
ズ

ん
ん
ん

見ているだけのつもりだった。だけれども何故だろう。

ごくごく自然に僕は、妻の唇へ自身の唇を重ねていた。

舌を絡ませ中に満たされた唾液を味わう。

んんん
んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

んんん

別の刺激が加わったことで具合が変わったのか、誘われるように

友人は妻の中で達していく。

あゝいっ♡♡♡♡♡

びゅん♡

せゅん♡♡♡♡♡

あ...

あ...

あゝあゝ♡

びゅん♡

せゅん♡♡♡♡♡

それに合わせ、妻の体も小刻みに跳ねた。

交わりの終わりを告げる独特な空気の中、熱を帯びた妻の瞳は静かに何かを見ていた。

この行為に私は、
何を思っていただろう。
何を感じていただろう。
かつて友人であった2人の前で、
私はハダカになっていく。





夫のソレとはまた違ったあの人(のモノ)は、
私の口を塞ぐ固い栓となっていた。

こうして夫の前で行為に及ぶのは、もう何度目だろう。
どこか慣れてきた自分に、不思議と驚きはなかった。

あま
あま

ん♡

ん...♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡



私の芯に、熱を帯びたあの人の息がかかる。
それだけでもこぼれはゆくてどどどとなく感じてしまいますのよ。
その舌先は時折その芯を突き揺らした。
鋭い快感が、理性を溶かしていく。

奥を塗り尽くすように、苦味のある液体が注がれる。

そうするのが当たり前であるかのように私は、

喉を鳴らしながら一滴残らず飲み干していく。

それでも変わらず大きいままのソレは、

夜がまだ始まったばかりであることを教えてくれた。





あの人が入ってきて中が押し広げられる。
角度がついた動きは、
いつもと違う場所を叩るように刺激する。
あの人動く度に私は、
小刻みに震え声を上げた。



どれだけ声を上げても
私を貪る動きは止まることはなく
激しい痙攣が訪れ私は自分が何度も達していることを知る。
その度に思考は白く塗りつぶされ、
私は快感の波に溺れきっていた。

おっちゃん
おっちゃん
おっちゃん

おっちゃん

おっちゃん
おっちゃん

おっちゃん
おっちゃん

おっちゃん

おっちゃん
おっちゃん
おっちゃん



ズルッ！...♡

ニギッ...

奥に注ぎ込まれる感覚が、

薄れかけた意識をつなぎとめる。

ああ、この瞬間はゴッソリした。

あなたは何しても手や足を...

ただただ見つめておられる姿を見つめて...

ズルッ♡
ニギッ♡

ニギッ♡

ズルッ...

ズルッ♡

ズルッ♡

あ...

あ...♡

昔から、ずっと変わらない。

私が夫のものになっていくのを、ただ見ていた。

悔しがらなくてもなく、嫌がるでもなく、喜んでくれた。

きっと本当は違うのに。

今も昔も、優しいままの人。

だから……

るほく

はあ…

あ…

ギ
ニ…





わざと避けてらへてくれた口付けを、あなた。
つながった唇と舌からは、
眠らせられていた気持ちが流れ込んでくる。
とても歪なけれど、きつとあなたとの形。

そして、私の旦那様。

あなたの愛も歪曲しているかもしれない。

だけれども私は、そんなあなたの心すらも嬉しかった。

私はこの行為の中で初めてその目を見つめ、手を伸ばす。

「あなた、来て...」



は...

は...

す...

あはっ…♡♡♡

あはっ♡

あはっ♡

あはっ♡

あはっ♡

熱に挟まれ、熱に溺れていく。

2対の手は私を弄り、抱え、撫で、揉みしだいた。

私の全身はされるがままに2人を受け入れ、

身体的な快楽と精神的な充足感が私を包む。

ズパ♡

カッ♡

チキ♡



あま...♡
ふあみ♡
はー♡

は♡

せ♡
せ♡
せ♡

せ♡

♡

♡

♡

ドカッ♡
ビュッ♡

ガクッ♡

2人は2人の思うがままに、私を愛していく。
中も外も、私の全ては2人に埋め尽くされる。
私は2人分の精をこの身に受けながら、
私たちの新しい形が出来上がっていくのを感じていた。



ほら...♡

ま♡

んっ...♡

んっ...♡

どれだけの時が経ったのだろう。

何もかも忘れてしまっほと長い間、私たちは交わっていた。

夜はまもなく終わる。

私は一人横たわり、熱いものが私の中から流れ出していくのを感じてた。

俺は夢の中で彼女を見ていた。

いや、夢じゃなくて記憶なのかもしれない。

彼女があいつに思いを告げられたであろう日。

「できることなら、ずっと三人でいられればいいのにね」

彼女は夕日を見ながらそうこぼした。

今までのようには会えなくなる大学生生活最後の日。

「ずっと、ずっと一緒だよ」

彼女は微笑みながらそう言った。

そうだ、これは俺が見たあの日の彼女だ。



あーっ♡
あーっ♡
あ♡

はー♡

あ♡

あ♡

ズッ...

ズッ...

俺はあの時と変わらず彼女を見ている。
俺も、彼女も、あいつも、この舞台から降りることはなかった。

彼女の腹が膨れたとしても、終わりは訪れない。

このまままでいまでも沈み、溺れていくんだろう。

「ねえ、これで本当に、私たちがずっと一緒だね」





あ...あ...

あ...あ...

彼女は、今まで見たことがないくらい幸せそうに笑っていた。

そうだ、きつと、これで良かったんだ。

今回の、これからも。

俺たちは...

又々...

又々...



























あふ
あふ
あふ
あふ

あふ

あふ

あふ
あふ
あふ

あふ

あふ

あふ

あふ

あふ
あふ
あふ





あー
わー

もも
もも
もも
もも

もも
もも

もも

はたはた
はたはた

























又矢...

矢...

矢...

















































































